

# 漢文訓讀法批判

高 木 仡

## 序 論

我國に於て漢文教授法として採用してゐるものは、大體に於て訓讀法である。無論一部に於ては、音讀法、否、直讀法と云つた方がよいかも知れぬが、此の方法を用ゐてゐる學校もあつた。しかし、其れさへ廢止になつたと聞いてゐる。して見ると、殆ど全部が訓讀法を採用してゐると云つてもよいであらう。其れには確かに存在理由があつた。しかし、私的方法としては、其れが如何なる方法であらうと、理解さへ出來れば、其れでよいのであるが、一旦、此が一般教授法として採用された以上、其の方法に、容觀的普遍妥當性を要求しなければならぬ。然るに、此の方面に對しては、一般教育者は云ふまでもなく、専門的の漢文教授者自身も、余りに無關心で過ぎて來てゐる様に思はれる。勿論、近世以後になつてからは、此の方面を論じてゐる人もあるが、しかし、其れ等は、何れも、長い間の傳統にとらへられ、眞の漢文教育の爲めには、沈著と果斷とを以て行ふ事は出來なかつた恨みがあつた様に思はれる。故に、今や此等の問題を此の儘で默過させる事は、教育的良心から許せぬ立場に立ち入り、萬難を廢しても、如何に在らねばならぬかと云ふ眞の漢文教授法の「在り方」を、究明すべきであると痛感するのである。

扨て、眞の漢文教授法の「在り方」を研究する第一段階として、從來の訓讀法を、一度正しい觀點から批判吟味する必要がある。そして

- (1) 何處に訓讀法の缺陷が存するか。其の原由は如何。——(訓讀法の價值批判)——

(2) 其の缺陷は救済可能なりや否や。——(訓讀法の存在可能性の吟味)——  
を明かにし、次に、

(3) 若し出来なければ、其れ以上の方法ありや否や。——(新しき方法の發見)——

(4) 其の實現可能性ありや否や。——(其の方法の實現可能性の吟味)——

大體、以上の様な論述過程を以て、此の問題は進むべきであると思ふ。しかし、本論に於ては、主として(1)(2)の問題を取り扱ひ、(3)の問題は、其の中に暗示的に明かにして行かうと思ふ。

## 本 論

其處で、先づ訓讀法の批判究明の問題であるが、此の問題を解決すべき最も正しい方法としては、訓讀法を歴史的に見て行くと云ふ事であると思ふ。故に、以下、訓讀の歴史的展開を、素直な心を以て、概観しよう。

### (1) 訓讀の發生

訓讀の發生を考へるには、一應、經籍の我國に傳來した當時の讀法を考へる必要がある。しかし、此處には既に經籍傳來に就いて問題が存するのであつて、現今に於ては、歴史上に認められてゐる應神天皇以前であると云ふのが、一般に正しいとされてゐる。しかし、其の當時の讀法は現在に於ては、到底明かにし難い。應神天皇當時、王仁・阿直岐等の漢籍傳來は、其の儘信する事は出来ぬとしても、確かに、此の頃からは、漢學が目ざましく活動し始めたと言ふ事は、其れ等の傳説の存する事から認められるのである。然らば、當時の讀法は如何なるものであつたか。文教溫教「訓點便山」「漢字三百考」等に於ては、皆、此の當時は既に訓讀法が採用されてゐたと述べてゐる。故に、此の説に従ふと、訓讀法は、早くも此の時から始まつてゐたと云へるのである。併し、此は全く推論であつて、確かな資料を基礎としての結論ではないだけ、信を置けないのである。又古來の傳説に依ると、眞備の考へ出した方法とする説があるが、此は、恐らくは、明魏法師の「片假子反切義解」の序の中に於て、片假字は眞備の作なりとしてゐる

る處から生じた附會説であらうから、此も信するに足らないのである。一體、訓讀すると云ふ事は、始めて創り出すには非常な難事であつて、兩國語の形式・法則等を熟知した時でなければ、出来ないものと思はれるから、其の様に古い以前に遡る事が少し無理の様に考へられる。しかし、奈良朝時代に於ては、既に訓讀の事實があつた様に思はれる。例へば「日本書紀」の訓註、「古事記」の序文・其他、推古朝の碑銘・背銘等の漢文形式を合せ考へて見ても、訓讀した形跡を止めてゐる様に思はれる。しかし、其れさへ、あつたらうと云ふ推論を力づけてはくれるが、あつたと云ふ確證を得るには不十分である。故に、別方面の材料から訓讀の發生時代を確めて行かねばならない。それは、

(イ) ヲ點の發生

(ロ) 片假名の發生

の推定時代である。ヲ點の發生は、何故に訓讀の發生と關聯するかと云ふに、ヲ點と云ふものは、云ふまでもなく、漢字の一字々々の四隅・中央等に點を附して、助辭・返點等の働きを代用させた一方法であるから、此が訓讀發生の時期を考へる手懸りとなる事は、勿論である。然らば、片假名の發生は、何故に關聯あるか。其れは、當時の學者が始め、漢籍を訓讀する際に、眞假名を以て其の訓方を本文の間に書き込む事が行はれ出した。所が狹隘な空間に迅速に記入する要求から、點割を省いた符號的なものが生じて來たのである。片假名が、此の様な發生原因を有してゐるとしたならば、其れが、訓讀の發生と密接な關係を有してゐる事は、自ら明瞭になるであらう。此に就いては、村田春海の「字說辨誤」や「假字大意抄」又前記の「文教溫故」等が述べてゐる。殊に、「文教溫故」には、片假名が、訓點記入に原因したと云ふ理由を、

(イ) 眞假名が單獨では、容易に省文にならなかつた事實

(ロ) 古い片假名の資料が皆、訓點用として記されてゐる事實  
の二つに求めてゐるが、傾聴すべき議論であると思はれる。

扱て、それでは、ヲㄱ點の發生は何時頃かと云ふ問題になるのであるが、此は、今精しく述べる必要もないので、極く大略、私の推定論を得るまでの過程を述べて見ると、

(イ) ヲㄱ點發生時代の概況―遣唐使の廢止、學校の衰微等に依り、從來行はれてゐたと思はれる直讀法が消亡し始めた時代の考察。―

(ロ) ヲㄱ點の名稱・性質・職能の考察―此處に於ては、ヲㄱ點の發生原因が、備忘の爲めの便法である事が明かにされた。―

(ハ) 最古のヲㄱ點付本の考察。

(ニ) 四聲の考察―ヲㄱ點は、四聲からヒントを得たものであるから、四聲の考察が必要である。―

(ホ) ヲㄱ點に表はれてゐる助詞の研究。

以上の結論として、ヲㄱ點の發生は、大體、平安朝初期と推定出来るのである。

次に、片假名の發生も、

(イ) 眞假名の變遷情態

(ロ) 最古の片假名付本の考察

の研究から、矢張り、平安朝初期、奈良朝の末期と推定出来るのである。

以上に依つて、訓讀は、遅くとも平安朝初期に於ては行はれてゐた事が明かである。しかし、此は、確かな材料を基礎として考へられた訓讀法の發生時期の最低限度を規定するものであるから、實際の訓讀法の發生は、其れ以前にあつたらうと云ふ推定は可能である。

## (2) 訓讀の歴史的展開

此の様に發生した訓讀法は、其の後、歴史の進展と共に、如何なる變化を現出したか。以下、此に就いて述べ

て行き度いのであるが、訓讀の歴史を知るに、最も依據とすべき材料は、訓點であるから、訓點の變遷を眺めて行く事が、訓讀の歴史を知る最も良い方法であると思ふ。しかし、此處に云ふ訓點と云ふのは、勿論、返點と送り假名とを總稱して云ふのである。此の兩者は、發生當時から、既に密接不離の關係で並行して用ゐられて來てゐるものであるから、此の兩者を分けて考へると云ふ事は、無理の様である。しかし、よく其の發展の跡を、内面的に觀察した時、必ずしも、兩者は、同一でない事に氣づくに至るであらう。故に私も今、此の訓點の歴史を見るに當つて、返點と送り假名の二つに分けて考へると云ふ叙述方法を取らうと思ふ。

### (イ) 返點の歴史的變遷

しかし、此處に述べる返點の變遷は、形態上から論じたものであつて、返點の位置に就いての變遷、例へば、著しゝ例としては、

傳不<sub>レ</sub>習乎(新註) 傳不<sub>レ</sub>習乎(古註)

の如く、古註と新註との差に於て見る如きが、其れである。此の様な變遷は、文の内容上から來る變遷であつて、返點其のものゝ性質を論ずる場合に適切ではない。而も、其の様な變遷が可能であると云ふ事は、要するに、訓點訓讀の價值を減ずるものゝ根據となるもので、今更取り擧げて論ずるまでもない事であるから、此は省略する事にする。

形態上から見た場合、返點は、平安朝以後、大體、三階段を経て進展して來てゐる様である。即ち

- (1) 平安朝中期—發生時代—
- (2) 鎌倉時代—略々完成時代—
- (3) 室町時代—整備時代—

が其れである。此の具體的の一々の説明は、省略するとしても、此の様な歴史的變遷は、何を物語つてゐるか。返點が發生し、それが、進展し、遂に完成の域にまで到達した其の内面的必然性に、何を藏してゐるかを明かにしなければ

ばならない。返點の發生した直接原因は、

(1) ヲ一點は、祕密的にして容易に知り難き事

(2) ヲ一點は、多種多様にして記憶し難き事

(3) ヲ一點には符號的のものが多し。符號的なものは、學習の方法無くしては、亡びるものであるから、學問の衰微は遂にヲ一點を消滅させるに至つた。

の如きものにあつたのであるが、しかしそれよりもつと根本的なものとして、奥深く流れてゐたものと思はれるものは、平安朝に廣く行き渡り、誰しも抱いてゐた「安定を求むる心」であり、其れが、保守的傾向となり、主知的便利主義を喜ぶ風潮を現はし、形式と云ふ様なものに、當座の慰安を求めてゐた時代精神の表はれであつたし、又鎌倉時代に於て整備した理由は、當時は、學問の轉捩期であり、而も武家の出現に依り、下流階級、民衆力が擡頭した時代であり、其の反面、古き、高き、尊きものゝ没落を意味し、其れに伴うて、漢學は不振の状態に陥り、一般的素養が極度に低下した時代であつた。此の様な時代にも拘はらず、學問に生きんとする者が、其の學問を生かさうと努力した内面的な活力が、此の返點を完成にまで築き上げたものではなからうか。

かくの如く、變遷には、諸原因があつたのであるが、結局、共通的に一貫してゐる必然性は、返點の中に内具する「理解に至る便法」と云ふ一性質に、依存してゐる様である。便法と云ふものは、要するに、便利主義をモットーとしてゐるものであるから、相對的のものであり、決して絶對的のものではない。何故ならば、便法は、體驗の同じ者の中に於ては、共通的であり、有價值であるが、體驗の相違する者に取つては、便法必ずしも便法とはならぬのであつて、時としては、不便法となる事さへある。此處に云ふ體驗の相違とは、文を理解する上に於ては、理解の方法の相違・理解能力の相違と云ふ具體的なものとなつて現はれて来る。理解の方法の相違に就いて云へば、例へば、訓讀法は、我國人に取つては便法であるが、理解方法の違ふ支那人に取つて、又西洋人に取つては便法とはならず、却つて

不便法極るものであらう。又、理解能力の相違に就いて見れば、理解力の豊富な者程、便法は不必要になり、蛇足となる。實際の例に於ても、漢文の造詣が深い人程、便法たる訓點が不必要になり、時には、理解の邪魔にさへなる事がある。故に、理解能力、又は理解の仕方が相違すれば、便法たる返點は變遷しなければならぬ運命にある。而も、此の返點の歴史的變遷中には、此の返點の中の一性質たる「理解に至る方法」の吟味が足りなかつたものである事を知らねばならぬ。我々は、此處に文の理解と、其の方法の問題を取り擧げて、其の點から、返點（勿論、送り假名にも共通する處もあるが、）の批判を下して行かねばならない。

文と云ふものは、單なる「存在」ではなく、誰かの精神生活の「表現」であり、「表現」たる以上、其處に何等かの價値に向ふ目的を有してゐて、其れ等一切が、文字面の上に、全體的に統一をなしてゐるものである。此の様な對象を理解する場合には、第一に、其の外的表徴から出發し、其れを契機として、認識主觀自らの精神をば、其の文中の統一に合致させる様に追構成し、それに依つて對象を追體驗する事に依つて、始めて理解と云ふ事が可能となる。

然らば、此の理解に至る爲めに第一に着手すべき外的表徴の認識は、何に依つて可能であるか。其れは、其の文特有の文法であらう。文法こそは、表現する形式の最も客觀的・普遍的意味を有するものであつて、表現も、此に依つて可能であり、理解も此に依つてこそ正しい把握が可能となるからである。然るに、訓讀では、眞に漢文特有の文法は認識されない。何故ならば、訓讀法は、國語法に準據してゐるものであつて、漢文の文法を無視してゐる點が、非常に多いからである。例へば、「有」と「無」との品詞論に於て、兩者とも、形態及び作用に於て、全く同等にして、共に動詞たるべきであるのにも拘はらず、國語法に牽引されて、一を動詞とし、一を形容詞としてゐる。此等が最も極端なるものであらう。文の眞の理解は、其の文の作成者の體驗を追體驗する事であると云つたが、其れは、單に文字面だけの解釋ではなく、其の文が構成されるまでの内面に突き進んで、文の表現に至るまでの過程に重きを置き、其處に行はれる形象化の作用を吟味探究して始めて完全に行はれるものである。其れは、思惟の學び方から出發すべ

きであつて、其の爲めには、原形ありのまゝの姿からのみ可能となるものである。従來の漢文註釋本等を見るに、其の解釋方法は、形式の讀了・了解から直に、文の原義へ飛躍して、其の間に、必然的な連結を見出し得る事は出来なかつた。それでは、「思想」の概括は得る事が出来るかも知れないが、眞に思想が躍如としてゐる「文」の理解は出来ない。然るに、漢文に於ては、形式から一足飛びに、文の原義に向ふ方法を取るものが多い。此は直覺主義と云はれるもので、屢々獨斷に陥る危險を有してゐる。其の様な方法は、出来るだけ、我々の方法から排撃しなければならぬ。我々の採用する方法は、行處までも客觀的、普遍妥當性を要求するものである故に、其の方法は、決して、偶然の思ひつきや、輕率な獨斷であつてはならない。一定の原理と過程とを以て行はれる周到な理論的方法が必要である。非合理的な直觀や、藝術的想像に依る理解は、勿論可能であるが、教育的理解の方法としては、普通の人々が、其れに則る事に依つて、誤りなき理解に到るべき方法が考へられねばならぬ。此の點に於ては、返點は、思惟の方法が違ふ點に於て、文法を無視する點に於て、眞の理解に到る方法ではなく、又單なる便利主義に存在價值を有してゐる點に於て、學的には價値の無い方法とならざるを得ない。

(ロ) 送り假名の歴史的變遷

此の變遷も、大體、返點と殆ど同じ理由に依つてゐる。即ち

(1) 假名が、ヲ一點より理解し易い點

(2) ヲ一點が、免角、まぎらしい點

等の原因に依つて、其の史歷的展開は、用ゐられる範圍の擴大となつて現はれて來てゐる。今此を分割すると、次の様に分けられると思ふ。

(1) 平安朝中期—發生時代—

(イ) ヲ一點と送り假名との重用



(ロ) ヲヲ點と送り假名との互用

しかし、此の時代に於ては、ヲヲ點の勢力が未だ衰へず、送り假名は、寧ろ補助的に行はれてゐる様である。

(2) 鎌倉時代—假名價值發見時代—

(イ) ヲヲ點と送り假名との重用

(ロ) ヲヲ點と送り假名との互用

(ハ) 僧侶間に、送り假名のみが用ゐらる。

送り假名の價值を發見し、此を通用する様になつた時代で、此は送り假名の革命的一轉回期であると思ふ。

(3) 建武時代—送り假名の價值實現時代—

(ヲヲ點と送り假名との重用のみ)

ヲヲ點と送り假名との互用が全く廢止されて、重用のみ獨り行はれてゐる事實は、送り假名の價值が、愈々廣く認められて、ヲヲ點の獨立性が、次第に消失して行く現象を示してゐる。

(4) 室町時代—繼承時代—

(送り假名のみを附するものが増加してゐる)

假名抄の出現も、此と同じ理由の下に考へられる。

(5) 徳川時代—完成時代—

(送り假名のみのも、専ら行はる)

ヲヲ點のみのも、或は送り假名との重用・互用のものは、公卿・博士間に少し行はれてゐるに過ぎず、一般には、用ゐられなくなつてしまふ。

此の歴史的變遷も矢張り、返點に於ける變遷に見る如く、便法と云ふ性質に依つたものである。ヲヲ點と送り假名

とを比較して見るに、其の作用に於ては、少しも變つてゐないのであつて、ヲ點中の星點等は、送り假名よりも秀れた作用を有してゐるとさへ思はれるものである。此の點に就いては、ヲ點と、假名點との先後問題が考へられるのであるが、私などは、假名點が先で、ヲ點が後であらうと考へられる程、ヲ點中には、意識的に統一を加へた跡が、感ぜられるのであるから、便法と云ふ點に於ては、假名點に少しも遜色がないものである。しかし、假名の普遍性が、次第に表はれ、其れに對して、ヲ點の祕密性は、漸く、其の普遍性を稀薄にさせて來た結果、遂に、送り假名に其の位置を譲らざるを得なくなつたのであるから、送り假名の便法たる性質は、曾ては便法たるヲ點と同様の運命を辿らざるを得ないと云ふ事を豫想してゐる。此の事に就いては、返點の便法たる性質の處に於て、既に論じたのであるから、以下省略する事にする。

以上は、主として、送り假名通用の範圍から見て論じたものであるが、更に、直接的に、送り假名其れ自身に於ける變遷の跡を見て行かねばならぬ。家學として、傳統を最上と重んずる家點に於ては、さまで變遷は無いのであるが、しかし、長い間の歴史の中には、種々なる變化を來してゐる。先の返點の條に於ても述べた如く、文の内容上から來る送り假名の變化は、返點と同様、此處では論ずる必要はなく、又、送り假名其のものに内在する性質に關係するものでも無いから、此を省略する事としても、同意義の意識の下に加へられた送り假名の間にも、變化が非常に多い。今、其の例は略すが、其の原因は奈邊に存するかは考へて見る必要がある。送り假名と云ふものは、文字面に表はれてゐる表徴に、適宜、辭書的、一定の譯文を付して行くと云ふ方法である。此處に、便法たる性質を有してゐるのであるが、其れでは、眞の文の解釋とはなり得ない。文字の意義は、それ／＼文中に於ては、固有の意味を有するものであつて、絶対に他のものに買換出來ない限定的排外性を有してゐる。此處に、置換を主とする送り假名が、變遷して止まない根本原因があるのではなからうか。勿論、始めに與へられた送り假名は、眞に近い譯文であつたかも知れないが、其れが何時までも其の儘でよい筈はない。言語は、常に變遷して止まないものである。しかし、送り假名は、

読み方を示してゐる限り、文字に示されたものであるから、どうしても、固着的であり、靜止的であり、發展する事は少い。故に、言語の發展に伴ふ事は出來ず、時代の經過と共に、次第に、後へ後へと取り残される現象を呈して來る。比較的長い間の中には、其の送り假名の示す言語は、現に通用してゐる言語と、余程かけ離れたものになつて來る。随つて、送り假名の理解其のものが、困難になると云ふ奇現象を呈するに至るであらう。かゝる時に到つて始めて、送り假名の改正が試みられるものである。しかし、漢文其れ自身、保守的なものであり、送り假名も、出來るだけ、原形を生かさうとしてゐるものであるから、送り假名は、兎角、變遷を躊躇してゐる。室町時代に、訓點、殊に送り假名の改正を試みた清原宣賢は結局、此の様な自然的傾向に逆いて、出來るだけ漢文を生かさうとして現はれたものである。其の事は、宣賢自筆の「論語」及び「中庸」の奥書に見えてゐる。しかし、それでも矢張り、嚴然たる勢力となつて、送り假名は動いてゐる。假名抄としての表現形式は、此の様な要求を最も満たしてゐる例であると思ふ。又徳川時代に於ては、此の送り假名に對して種々なる改正が行はれてゐる。成るべく、國語に近づけようとする論者、其の反對者等が其れである。此等も畢竟、此の様な表はれであると云つてよい。現今行はれてゐる送り假名は徳川時代以來、其の儘々慣用されて來たものであるから、既に、其の言語活動は、我々現今の言語活動と、余程違つたものである。今に於て、猶此の状態であれば、今後如何なる距りを其の間に生ずるか、豫測すら許さぬものがあらう。然らば、現今の送り假名の有する生命さへ知り得る事になると思ふ。

此の様に於て觀察して來ると、送り假名さへ、其の便法主義たる點に於て、恒常性なく、其の文字面に表はれた文字の意義の必然性を輕視する點に於て、其の理解能力の貧困性を暴露し、又讀み落しのある點に於て、其の方法が、眞の理解に至る方法ではない事が明かにされたと思ふ。

此の様に於て、返點、送り假名を採用した訓讀方法は、到底、眞に理解に到る事が出來ない方法であると云ふ事を論じて來たのであるが、然らば、從來、訓讀法を採用して來た漢學者は、盡々、理解にまで到らなかつたかと云ふ問題

に就いて臆斷を加へて、此の訓點の批判を終り度いと思ふ。

### (3) 訓讀法採用者に就いて

從來、漢文の理解能力を有してゐた人は、漢學者であつた。此に就いては、誰しも異存はない事と思ふ。而も、其の人達は、殆ど全部、其の理解能力を訓點から得て來てゐると言ふ事も、事實である。しかし、實際、其の人達が、其の理解能力を、直接訓點から得て來たか否か、一應吟味して見ねばならぬ。私は、若し、其の人達が、訓點にのみ終始して居つたならば、其の様な理解能力は得られなかつたと考へるものである。敏速に、理解する助けとはなるかも知れないが、理解能力を得る點に於ては、殆ど、訓點は役立つてゐないと思ふ。何故ならば、訓點と云ふものは、表面的には、さうでもないが、内面的には漢文の形式を分裂させて、新しい組立にまで再構成させるものである。故に、訓點のまゝからは、漢文の形式の理解は殆ど困難である。それを、訓點の力に依つて知ると云ふ事には、訓點を其の儘に促へると云ふよりも、其れを契機として一飛躍を試み、元の眞なる姿を捉へると云ふ直觀力が必要であつた。此の藝術的なとも言ふべき直觀力が無い者には、到底、漢文の理解力は得られなかつた。其處には、一旦構成しては、其れが原典に突き當る事に依つて分解せられ、更に、新たな構成をすると云ふ辨證法的絶えざる訓練の努力の結果、其の様な効果を見た事を知るのであつて、常に原典に依つて、最後の力を獲得してゐるのである。漢文の理解の困難は、實に、此の訓練にあつたのである。しかし、其れさへ、先述の如き、個人の直觀力が必要であつて、其れを缺乏せる者には、到底、至り得ぬ境地である。しかし、其れでは、教育と云ふ事は成立しなくなる。且、妥當性の少い、非科學的方法でしかあり得ない。我々の採用する方法は、誰にも妥當するものであり、可能性の十分にあり、而も、有用なものでなければならぬ。訓點は、以上の如き觀點に立つて見た場合、既に、普遍的と云ふ點に於て缺ける處があり、理解に到る方法として絶對的のものでないと云ふ事が解つたのであるから、此からの教育方法として持つ價值に對して、聊か疑念を抱かすには居られないのである。客觀的、科學的方法を用ゐ、教育の徹底を謀ると云ふ

今日の流勢からは、どうしても取り残されねばならぬ運命にあると思ふ。

#### (4) 訓讀法の缺陷

以上の長き叙述に於て、訓讀法の歴史的展開を覽、其處に見出された訓讀の性質を、残す處なく批評して來たのであるが、缺陷とも云ふべきものも、其の時に於て、論じて來た積りである。しかし、今又、次の問題へ移る手續きとして、更めて列舉して見ると、大體、次の様になる。

- (1) 便法と云ふ事は、理解と其の方法の條に於て見た如く、避くべからざる理論的缺陷を有してゐると云ふ事
- (2) 國文法に準據してゐる結果、解釋上に於て、種々の缺陷を有してゐる事
- (3) 訓讀に恒常性がなく、不徹底である事

#### (5) 訓讀法の救済法

然らば、右の様な缺陷に對して、何等かの救済法が可能であるか否かと吟味する必要が起る。今右の三條に従つて、其の救済法を述べて見よう。

- (1) 此は、理論的缺陷として、此の救済法は絶無であると思はれる。
- (2) 此に對しては、救済は可能である。しかし、それは、嚴密なる原典の吟味の上から、救済されるのであつて、訓點のみに終始する時は、一時的の救済は可能であつても、永久的救済法は得られない。
- (3) 此に對しては、種々なる救済法が行はれ得る。

#### (イ) 訓點統一

此は或る程度までは可能である。しかし、完全を期すると云ふわけには行かないと思ふ。何故ならば、訓讀は其の發生に於て知る事が出来る様に、漢文の一種の翻譯である。狹生徂徠も、

此方學者。以方言讀事。號曰和訓。取諸訓詁之義。其實譯也。而人不知其爲譯矣。(「譯文祭路」)と云つてゐる。

(題言)

翻譯である以上、其の時代の國語を無視するわけには行かぬ。訓點の多樣存在性は、實に此處に原因してゐるのである。然るに、訓點統一を計つた場合、此の訓讀の本來の性質に逆くのみならず、國語を無視すると云ふ大きな問題を醸す事になるので、從來の國語學者等の漢文教育を批判する場合、指摘してゐる點は、此である様に、到底、完全なる救済と云ふ事は出来ないのである。故に、此の缺陷の救済は、訓讀の白減を意味してゐる。

(ロ) 訓點の新式法

例へば、當時の口語を以て、最も妥當な方法を一定ならしめる方法である。一部の學者間に提唱されてゐると聞いてゐる。又、文之禪師の主張も此に當るものである。其の説は、恭畏阿闍梨に對する反對の中に見えてゐる。

爾(恭畏)知清家之有倭點。不知集註之異倭點。男女共稱子。用之男子則訓子<sup>ヲノコ</sup>。用之女子則訓女<sup>ムスメ</sup>。以其理之易通也。「詳說」之所幸。爾何繫之。若爾之愚。偏知其常。而不知其變者也。所謂小丈夫之執一而不通者也。

假令其音雖不相通。知道者。以易通理爲要。讀「爲」謂爲政則其理易解以故。予詳考「開心切解」。加此倭點。匪翊於此有其字訓之。易解其理者。雖曰百千萬言。我亦加倭點。(讀破收義)

確かに、此も一方法である。しかし、此は、原形と甚しくかけ離れたものになる。訓讀の發生は、漢文の原形に成るべく即して讀んで行くと云ふ點にあつたのであるから、訓讀の救済としては妙を得た方法ではなく、却つて、訓讀の白減に導くものである。先に、宣賢が排撃したものも、結局、此の方法であつた。中でも、此の方法に對する最も痛烈な駁論は、前の文之點に反對した恭畏の反駁論の中に見られる。文之が「論語」里仁篇の文を次の如く讀んでゐるに對しての反駁論である。

人之過也。各々於<sup>シテ</sup>其<sup>ノ</sup>黨<sup>ニ</sup>。

「於」訓徒者非也。又考「大全」。無其字訓。爾之誤也。「切解」之註。「於」當從看。黨是類。爾若如是以註之意。而直爲和訓者。至如詩三百一言以蔽之曰思無邪者。毛詩三百篇。皆是以思無邪之義。爲和訓乎。(正破收義)

如爾末世之愚人。稱理易通。以私心而推爲訓者。從師學訓詁者。終無之歟。(續破收義)

と云つてゐるのは、當然の論と云ふべきである。

故に、以上の如く、訓讀の長所とも云ふべき本質を、遺憾なく生かさうとする救済法は、訓讀の自滅となる事が明かになる。故に、此處に、其れらに幾らか改正を加へた救済法が生ずる。其れは次に述べる折衷法である。

#### (ハ) 折衷法

不二岐陽・太宰春台の説が此である。此は、返點・送り假名を出来るだけ少くして、漢文の本質に出来るだけ慣れさせようとする方法である。此の方法は、訓讀法と直讀法とを折衷させたものと云ふべきであるが、岐陽も春台も、第一次に直讀法の價值を認めてゐる如く、此の方法にも救ふべからざる缺陷が存するのである。其れは、此の方法を用ゐる時は、國語法が全然無視されて、却つて難解に陥ると云ふ弊がある。

#### 結 論

以上、長い間用ゐられて來てゐる訓讀法には、種々なる缺陷を有して居り、而も其の缺陷は、救済出來ぬ位、訓讀法其のものに本質的に結ばれてゐる事を明かにしたのである。私は、此の様な缺陷を有する訓讀法が、現今にまで行はれて來てゐる事を、寧ろ、不思議に思ふ位である。恐らくは、此は、訓讀法に代はるべき方法が、十分なる精密さを以て研究されずに放棄されてゐる爲めにあつたものではなからうか。然らば、今や、我々の爲すべき事は、唯單に、訓讀法を墨守する事に致々たる事を止めて、自由な態度を以て、漢文其のものに即した理解の方法を考察し、實驗すべき事にあるのではなからうか。此の方法こそ、次に來る我々の問ふべき問題であらう。